序 ―― (1)

第1部　生涯と思想の概観

1. 伝記 ―― (4)

2. 先行研究史 ―― (11)
2-1. 同時代人評 ―― (11)
2-2. シュペート・ルネサンス(1980年代) ―― (13)
2-3. 現在(1990年代以降) ―― (16)

3. 時期区分と思想の全体像 ―― (25)
3-1. 時期区分の試み ―― (25)
3-2. 各時期の思想の特徴 ―― (28)
1) 修学期(1901年―1910年) ―― (28)
2) 構想期(1910年―1916年) ―― (29)
3) 展開期(1917年―1929年) ―― (30)

第2部　構想期の著作について

1. 修学期から構想期へ ―「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年) ―― (33)
1-0. はじめに ―― (33)
1-1. イギリス経験主義の挑戦 ―― (34)
1-2. ヒューム哲学(認識論)の要点 ―― (37)
1-3. シュペートのヒューム論 ―― (39)
1-3-1. 何に対してヒュームは懐疑を抱いたのか ―― (41)
1-3-2. いかにしてヒュームは懐疑を解消したのか ―― (44)
1-3-3. はたしてヒュームは懐疑論者なのか ―― (49)

2. 構想の萌芽 ―「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年) ―― (55)
2-0. はじめに ―― (55)
2-1. 哲学と心理学 ―― (57)
2-2. 18世紀および19世紀の心理学の批判 ―心理学における論理主義 ―― (59)
2-3. 世紀転換期における心理学の変革 ―― (64)
2-4. すべての肯定へ向けて ―― (70)

3. フッサール現象学との対決と自身の哲学の構想 —『現象と意味』(1914年) —— (80)
3-0. はじめに —— (80)
3-1. 肯定哲学としての現象学 —— (82)
3-2. 『イデーンⅠ』の再構成 —— (84)
1) 本質、本質直観、本質学(第1篇) —— (85)
2) 現象学の方法と問題(第2篇) —— (86)
3) 現象学的探求の実践(第3篇と第4篇第1章) —— (89)
4) 理性の現象学(第4篇第2・3章) —— (91)
3-3. 『イデーンⅠ』への批判と言語と文化の哲学の構想 —— (93)
3-3-1. カント、ヒューム、ヤコービ —フッサールはヒュームの疑念に答えたのか —— (93)
3-3-2. 二つの直観と純粋意識について —— (96)
3-3-3. 言葉、理性、現実 —— (98)

結び —— (109)

付録:シュペート哲学の概説(翻訳) —— (113)
A) G.G.シュペート「シュペート」(百科事典『グラナート』の項目) —— (114)
B) A.I.バチンスキー「ソ連科学アカデミー御中」 —— (115)

文献目録 —— (119)